

大豆特定用途品種の栽培技術 (球磨特定用)

地場加工による地域特産品の原料として有用な形質を持つ大豆特定用途品種「すずおとめ」「エルスター」「キヨミドリ」の麦跡栽培においては、いずれも7月上～中旬までに播種した方が収量が高い。また、「エルスター」「キヨミドリ」については播種が遅れた場合は条間を狭めた狭畦栽培によって収量を向上させることが出来る。

農業研究センター 球磨農業研究所 (担当者: 金森 伸彦)

研究のねらい

人吉球磨地域では、あさぎり町を中心に転作作物として大豆生産が盛んである。また、近年は農産加工グループによる大豆を使った特産品作りが管内の物産館等で試みられている。

そこで、転作作物として大豆の生産拡大と大豆の地場加工による地産地消の推進を図るため、特徴ある大豆加工品の原料として利用できる特定用途品種の安定栽培技術を確立する。

研究の成果

1. 納豆用小粒品種「すずおとめ」は、フクユタカと比べて開花期で1～3日、成熟期で4～10日早く、収量はフクユタカよりも劣る。播種時期が早い方が収量は高くなるが、7月上旬までの播種では早い時期から倒伏するおそれがある。
2. 大豆独特の青臭みがなく多用途に利用できる「エルスター」は、開花期、成熟期ともほぼフクユタカと同じで、収量もフクユタカと同程度である。播種時期が早い方が収量が高く、また播種が遅れた場合は狭畦栽培(条間30cm)を行えば早播きに近い収量を確保できる。ただし、7月上旬以前の播種や狭畦栽培では倒伏程度が大きくなる。
3. 青大豆の「キヨミドリ」は、フクユタカと比べて開花期で1～5日早いですが、7月上旬以降の播種では成熟期はフクユタカとほとんどかわらない。通常の栽培では収量はフクユタカよりも劣るが、狭畦栽培(条間30cm)を行えばフクユタカ並みの収量が確保できる。

普及上の留意点

1. 排水が良く、地力中庸な黒ボク土壌での大麦作付跡における試験結果である。
2. 栽培にあたっては、品種育成者「(独)農業・生物系特定産業技術研究機構 九州沖縄農業研究センター」の許諾を受ける必要がある。
3. 各品種の形質を損なわないように、栽培および調製保管時における混種に注意する。

[具体的データ]

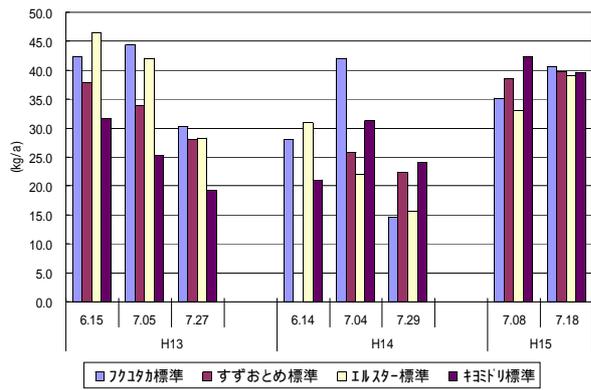


図1 各品種の収量の比較（標準栽培）

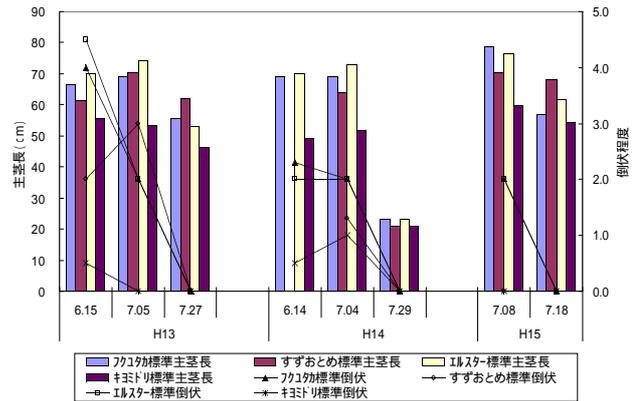


図2 各品種の主茎長と倒伏程度（標準栽培）

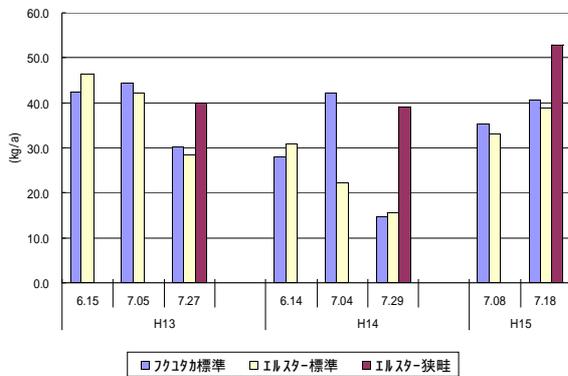


図3 エルスターの狭畦栽培における収量

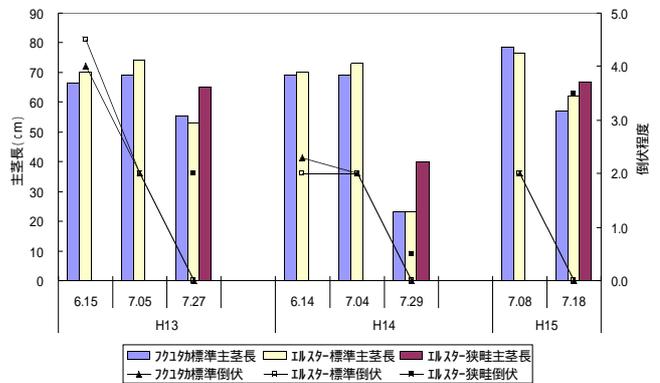


図4 エルスターの狭畦栽培における主茎長と倒伏程度

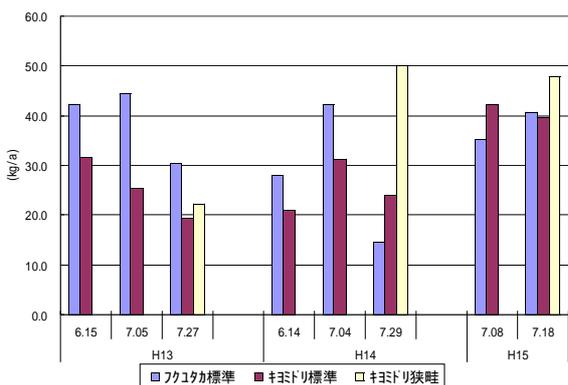


図5 キヨミドリの狭畦栽培における収量

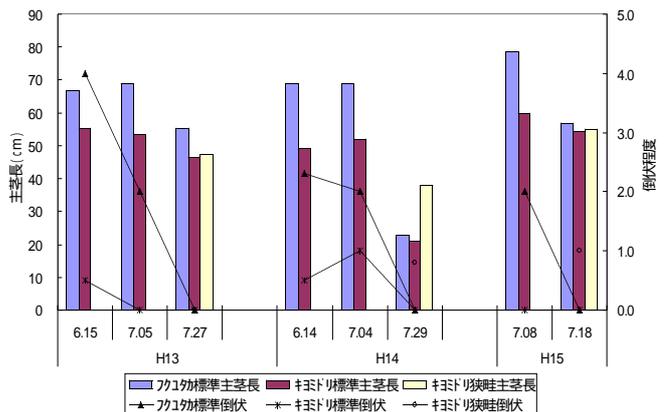


図6 キヨミドリの狭畦栽培における主茎長と倒伏程度

注1：各グラフの横軸は、年度と播種日。

注2：倒伏程度は、0（無）～5（甚）の6段階。

注3：栽植密度は各年次とも以下のとおり。

- （ 標準栽培：条間75cm×株間20cm、2本立
- （ 狭畦栽培：条間30cm×株間30cm、2本立